

「日仏交流の集い：室生のシャポールさん夫妻を迎えて」

「第131回フランス・アラカルト」開催（7/7）



会場の「菜宴」に入ると、ゲストのシャポールさん夫妻だけではなく、愛娘のミズキちゃんの姿があり、フランスからバカンスで息子夫婦と孫娘に会いに来られたご両親もおられて、賑やかな会の始まりとなりました。シャポールさんは、パリ地方出身で、来日前はサラリーマンをしていたそうですが、その彼の好きな地方は自然に恵まれたブルターニュです。しかも海岸部ではなく内陸部の森にこそ、ブルターニュの魅力があるとのこと。そこは観光客があまり多く訪れる場所ではないので、地図や写真を見せながら話して下さったことは、とても興味深いものでした。

ブルターニュはかつては中央から独立したブルターニュ公国をなし、古くはケルト人が住み、「プロセリアンドの森」にはアーサー王伝説と繋がりのある場所があって、今もケルトの文化が色濃く残っているそうです。「ランクー」(l'Ankou) と呼ばれる死神のような存在が、霧がたちこめるブルターニュの荒野を夕刻になると馬車に乗って徘徊し、この馬車の音を聞いた者には死がもたらされるとの伝説が紹介されました。ブルターニュでは、キリスト教の教会にさえこうした異教的な死神像があり、「宗教混淆」(syncrétisme) の現象がみられるそうです。



「ランクー」l'Ankou

ケルト文化の影響は音楽にも表れていて、この地方に広がる2種類のケルト音楽の紹介がありました。ひとつはケルトの伝統的な民俗音楽 (musique folklorique) です。ビニウ (binjou) とボンバルド (bombarde) の2つの民俗楽器に合わせて、お祭りで村人たちは輪になって踊っていました。もうひとつは、より古い民俗楽器ケルト・ハープ (harpe celtique) を復活させて、1960年~70年代にアラン・スティベル(Alan Stivell) という歌手を中心にケルト音楽のルネッサンスのような現象が起こり、フランス全土で脚光を浴びるようになった現代的なケルト音楽です。会場で実際に聞かせてもらった Tri Yann というグループの « La découverte ou l'ignorance » という曲は、ロックとのフュージョンで、強いメッセージが込められているように感じました。歌詞にはブルトン人であることのアイデンティティへの自問自答が表されていました。



今回は贅沢なことに、梨里香さん(中辻理事)の「パダン・パダン...」等、情感溢れる素晴らしいシャンソンを聞くことができました。さらには7月にちなんで中浦理事、シャポールさん本人とお父様、三野会長らによるフランス革命にまつわる話で盛り上がり、最後は「オーシャンゼリゼ」を皆で楽しく合唱しました。この歌は、元々はイギリスの歌だったそうですが、ブルターニュの文化もそうであるように、異なる文化要素が融合して、フランスだけでなく日本でも広く知られる歌となっています。異文化間の交通=交流を象徴するような曲といえるかもしれません。

あっという間に時間が過ぎて、さいごにこの日の参加者24名全員で写真撮影することを忘れてしまったのが少し残念でしたが、これからも様々な出会いの機会があることを楽しみにしたいと思います。(藪田章恵・浅井直子)

ブルターニュの魅力を知ってくださる皆様へ感謝！ Sylvain Chabrol

J'ai été très heureux de pouvoir présenter une région qui me tient à cœur la Bretagne. Cette terre de légendes aux paysages magnifiques mérite d'être connue. J'ai été étonné de rencontrer autant de personnes aussi intéressées par la culture française. Cet après-midi passé en compagnie des membres de l'Association Franco-Japonaise de Nara a vraiment été une très bonne expérience. Merci à toutes et tous pour votre gentillesse et votre écoute.

私にとって大切な地方ブルターニュを紹介することができ、とても嬉しかったです。素晴らしい風景をもつこの伝説の土地は人に知られるにふさわしいです。フランス文化に興味を持ってくださるあれほどたくさんの方たちに出会え、驚きました。奈良日仏協会の会員のみなさまとともに過ごしたこの午後は、本当にとってもよい経験になりました。みなさまのご親切そして私の話を聴いてくださったことに、感謝いたします。(シルヴァン・シャポール)

フランス文学の庭から <46> 名句の花束

三野博司 (会長)

Tout finit par des chansons. (1)

ものみな歌で終わる

(ボーマルシェ『フィガロの結婚』 1780年)



『セビリアの理髪師』

オペラ台本の素材を提供した戯曲作家といえば、なんといってもシェイクスピアが筆頭でしょう。若き日のヴェルディが若々しい力あふれるオペラに仕立てあげた『マクベス』、そして晩年の円熟を示す名作『オテロ』と、『ウィンザーの陽気な女房たち』をもとにした『ファルスタッフ』。これだけで3作ですが、さらに他の作曲家たちの手になる『ハムレット』『真夏の夜の夢』『ロメオとジュリエット』もあります。断然第一位ですが、このシェイクスピアに次ぐのは、18世紀フランスのボーマルシェではないでしょうか。彼は人気オペラ作品『セビリアの理髪師』と『フィガロの結婚』の原作者なのです。フィガロ三部作のうち、最後の『罪ある母』は凡作と見なされていますが、前2作は戯曲として成功しただけでなく、オペラ化されて不滅の名声を獲得したといえるでしょう。

この2作のオペラについては、私も映像で見る以外に、パリで何度か実際の舞台に接したことがあります。だが、そこはストライキ好きなフランス人のこと、オペラとて例外ではありません。オーケストラ楽員や合唱団メンバーのストライキではなく、道具方のストだったのがまだしも幸いだったといえるのかもかもしれません。歌手は衣装をつけて登場し、かんたんな小道具もあるのですが、舞台装置や大道具がありません。なんとも味気ないですが、歌や演奏さえよければそれでもいいとも言えます。むかしはLPレコードで音楽だけを聞いていたわけですから。

映画監督でもあるコリーヌ・セロー演出の『セビリアの理髪師』は、パリで2002年から2012年までたびたび上演されました。2002年にこの初演を見ました。趣向を凝らした楽しい舞台でしたが、数年後に再び見たときは、ストライキのため舞台装置がありませんでした。前回の記憶を必死で想起しながら、殺風景な舞台を想像力で補いました。他方で、『フィガロの結婚』は、1970年代からパリ・オペラ座でジョルジュ・ストレーレル演出による伝統的な舞台を再演し続けています。18世紀の雰囲気あふれる洗練された名演出ですが、これも2回目はストライキに出くわしました。このときも、前回の記憶が頼りでした。他の演目では、パリ・オペラ座のストライキに遭遇したことはありません。なぜこの2作なのか。主人公であるフィガロの反骨精神がストライキを誘発したのかと思ってしまいます。



『フィガロの結婚』

舞台上で機略縦横の活躍を見せるフィガロは、波瀾万丈の生涯を送った自身の姿だと言われています。先に書かれたのは『セビリアの理髪師』で、1775年です。大当たりを取ったので続編『フィガロの結婚』が書かれ、1780年に完成したものの上演許可がおりず、初演は1784年でした。このパリでの評判を聞きつけたダ・ポンテがイタリア語の台本を書き、モーツァルトが作曲して、早くも1786年にはウィーンで上演されました。登場人物名もイタリア語化され、原作のシュザンヌがオペラではスザンナ、シェリバンがケルビーノといった具合です。全編これ名曲といえますが、「手紙の二重唱」の美しさは比類がありません。

他方で、『セビリアの理髪師』のほうは、19世紀に入ってから、1816年、ロッシーニ作曲によってオペラになりました。多作であったロッシーニのオペラは、いまでは世界中で上演されていますが、その再評価が始まる1970年前後までは、『セビリアの理髪師』が唯一の代表作でした。お涙頂戴ものが多いイタリアオペラの中では、少数派の明朗喜劇です。メゾ・ソプラノが主役になるオペラは数少なく、『カルメン』と『サムソンとデリダ』が代表的な作品ですが、『セビリアの理髪師』は、同じロッシーニの『チェネレントラ』と並んで、ヒロインはメゾ・ソプラノです。ロジーナが歌うカヴァティーナ「ある声が今しがた」がやはり耳に残ります。(以下次号)

Le 14 juillet à Kyoto, en 2016 ブロソー総領事離日へ

会長 三野 博司

7月14日(木)17時から、在京都総領事館においてブロソー総領事主催によるパリ祭レセプションが開催されました。総領事からの案内状には、次の赴任地へ向かうため8月末離日予定であり、皆さまにお別れの挨拶をしたいとのひとことがありました。開会式において、総領事は、この3年間日仏関係はいつそう緊密なものとなったと述べられ、またとりわけ各地の日仏協会活動に対して謝意を表明されました。最後に京都での幸福な3年間を振り返られたあと、9月からはジャカルタの大使館で公使としての任務に就くことを報告されました。



シャンパンによる乾杯を皮切りにパーティが始まると、さっそく北川秘書の音頭取りで、各地の日仏協会会長が総領事を囲み、写真撮影が行われました。そのあと、福井日仏協会の大城閑会長、姫路日仏協会の白井智子会長らと情報交換を行いました。福井は創立5年、姫路は12年で、それぞれ比較的新しく活力ある協会です。とりわけ白井会長とは仏文・仏学史関係の共通の知人・友人が多いことがわかり、長時間の懇談となりました。

振り返れば、ブロソー総領事には、この3年間、いろいろお世話になりました。2013年秋に就任後、11月奈良に来られて、県庁、市役所、奈良女子大学を訪問されると同時に、奈良日仏協会役員との公式会見にも出席されました。さらに、翌2014年6月には奈良日仏協会創立20周年記念式典でご講演いただくと同時に祝賀会にも出席され、記念行事にひととき大きな榮譽を添えていただきました。その他にも、2014年2月および2015年11月の2回、ご夫妻で奈良にお越しになった機会に、日仏協会役員とのプライベートな夕食会に臨席され、和やかな懇談のひとときを過ごすことができました。新しい赴任地におけるさらなるご活躍を期待し、ご夫妻で日本に戻って来られる日を待ちたいと思います。

Nos amis francophones à Nara (7) Catherine et Paul CHABROL さんご夫妻



C'est grâce au mariage de notre fils avec une jeune femme de Kôbe que nous avons découvert le Japon. Quelques mois après leur installation près de Murô, nous avons décidé de leur rendre visite. Depuis 2012, nous sommes venus trois fois dans cette belle région de Nara. A chaque séjour nous sommes toujours aussi fascinés par la beauté de la nature. Les montagnes aux sommets pointus et les cascades qui bondissent de rochers en rochers nous émerveillent. Les temples et les jardins zen imposent le respect et le recueillement. Nous sommes toujours touchés par la gentillesse des personnes que nous rencontrons et qui ont pris du temps pour nous accompagner à des spectacles. Ne comprenant pas le japonais nous regardons avec étonnement les visages et les gestes des spectateurs qui expriment avec beaucoup de spontanéité leur admiration pour les chanteurs ou acteurs. A chaque retour en France nous éprouvons beaucoup de plaisir à raconter à nos proches et amis notre voyage.

私たちが日本を発見したのは、神戸出身のひとりの若い女性と私どもの息子の結婚のおかげです。彼らが室生の近くに住み始めて数ヶ月後、私たちは彼らのもとを訪ねることにしました。2012年以来、私たちは奈良のこの美しい地方にもう3度来ました。滞在するといつも、自然の美しさに魅了されます。頂上の尖った山々や岩から岩へと飛沫が跳ねる滝には、感嘆するばかりです。禅の寺や庭園は敬意と瞑想を求めてきます。私たちが出会った人びと、また私たちの観劇に時間をさいてくださる人たちの親切には、いつも感じ入ります。私たちは日本語はわかりませんが、歌手や俳優への憧れをととても素直に表明する観客のみなさんの顔や動作に、驚きながら見入っています。フランスに戻るたびに、近隣の人や友人たちに私たちの旅行のことを話すのが、大きな楽しみとなっています。

南仏 (Midi) 紀行から

中浦 東洋司

パリ・リヨン駅を出た TGV は、一路東南方向を目指して一瀉千里のイル・ド・フランス平原を走り、ほぼ 80 km を過ぎたあたりで、ケスタ盆地の縁を抜けてブルゴーニュ地方に入ります。ここは準平原状を成す丘陵地帯で、まさにブドウの栽培に最適の地形と気候に恵まれた地域なのですが、今回は素通りして地中海へ流出するソーヌ源流に出会うことになります。シャロン・シュール・セヌでは西側の大河ロワール河と直結する「中央運河」が見えて、パリと南仏諸都市とが船便でも結ばれているのがわかります。さて、小さなトンネルを抜けるともうそこはリヨンの北端であり、いよいよ南仏 (ミディ) の流域 (val) を下ってゆきます。聞き覚えのある諸都市の中でもアヴィニオンはその主邑で、かつて法王庁がここフランスにあったのです。広大なロワール河をさらに下るとアルルです。南部には複雑な形のカマルグ沼などが錯綜し、いたるところに地中海の香りが押し寄せていてフラミンゴ、野牛、野生馬が暮らす別世界なのです。そして沼周辺で収穫される米、塩田の塩がこの地の特産品です。



アルル市南端からカマルグの水田群を望む。
この地方の米作の年収量は9万トンに及ぶ。

折口信夫『死者の書』(Orikuchi Shinobu, Le livre des morts, 1943)

民俗学者・国文学者そして歌人でもある折口信夫 (1887-1953) は、中学校を卒業する頃、當麻寺之中之坊に 1 年ほど滞在していたそうだ。その間、折口青年は飽かず二上山を眺めていたことだろう。そんな彼が、二上山周



山越阿弥陀図 禅林寺蔵(国宝)。『死者の書』の着想源のひとつとされる。

辺を舞台に幻想的な物語が繰り広げられる独創的な古代小説「死者の書」を雑誌に発表したのは 1939 年 52 歳の時。その後改稿して 1943 年に本が出版された。長年にわたる構想が集約されたこの作品は、今なお多くの読者を魅了する。発表当初からこの小説に惹きつけられた堀辰雄は次のように記している。「僕ははじめて大和の旅にでるまえに、あの小説を読んだ。あのなかに、いかにも神秘的な姿をして浮かび上がっている葛城の二上山には、一種の憧れさえいだいて来たものだ。そうして或る晴れた日、その麓にある当麻寺までゆき、そのごしい山を何か切ないような気もちでときどき仰ぎながら、半日ほど、飛鳥の村々を遠くにながめながらぶらぶらしていたこともあった」(新潮文庫『大和路・信濃路』より)。

『死者の書』は、二上山に葬られたとされる大津皇子や、蓮糸で當麻曼荼羅を織りあげた中将姫らを彷彿とさせる人物たちが登場し、様々な神話・伝承・説話が重ねられ編みあげられた幻想的な物語。全篇を通じて難解ではあるが、冒頭の一節は、読む者の心をわしづかみにする。

「彼の人の眠りは、徐 (シヅ) かに覚めて行った。(…)。した した した。耳に伝ふやうに来るのは、水の垂れる音か。たゞ凍りつくやうな暗闇の中で、おのづと睫と睫とが離れて来る。(…)。さうして、なほ深い闇。ぼちちりと目をあいて見廻す瞳に、まづ圧しかゝる黒い巖の天井を意識した。(…)。したしたと、岩伝ふ雫の音。」(中公文庫『死者の書 身毒丸』より)

Il se réveilla doucement du sommeil. [...] *Shita shita shita*. Quel est ce son de goutte d'eau qui m'arrive à l'oreille ? Mes cils se détachent peu à peu l'un après l'autre dans l'ombre glaciale. [...] Et, encore l'obscurité. Les yeux bien ouverts j'aperçois alors le plafond de rochers noirs, qui m'opprime [...] *Shita shita*, c'est le son des gouttes d'eau qui coulent des rochers. (Kato Kunio, « Le commencement de l'acte architectural », *Dispositifs et notions de la spatialité japonaise*, Presses polytechniques et universitaires romandes, p. 43, traduit par Benoît Jacquet et Tsumori Keiichi)

死者が暗黒の岩窟で眠りから覚めて蘇ろうとするこの場面はとても印象深い。夢と現の間を彷徨いながら目覚めるブルーストの小説『失われた時を求めて』の冒頭の話者の語り思いおこされる。(浅井直子)

ガイドクラブからのお知らせ

★「勉強会」日時：9月24日(土) 14:30~16:30

会場：奈良市西部公民館第4講座室又は生駒市芸術会館美楽来セミナー室1(8月27日に確定、申込者に連絡)
講師：ピエール・レニエさん 参加費：会員1000円、一般1500円(当日資料代含む)

★「當麻寺散策」日時：10月15日(土) 14:00 近鉄南大阪線当麻寺駅に集合、17:00 同駅にて解散

(その後、有志にて飲み会) 見学：當麻寺曼荼羅堂・金堂・講堂、當麻寺中之坊(曼荼羅絵解き法話拝聴)

参加費：会員1500円、一般2000円(拝観料・絵解き法話料含む)

★申込先：Nasai206@gmail.com tel&fax 0743-74-0371 (浅井)

フランス・ワインの紹介 (3) 「ルイ・ニケーズ」(Louis Nicaise)

今回は夏にちなんでシャンパーニュについてお話しさせていただきます。シャンパンとはスパークリングワインの一つで、その中でもフランスのシャンパーニュ地方で特定のブドウ品種からシャンパーニュ方式と呼ばれる、瓶内二次発酵で造りだされたものだけに使うことが許されている名称です。

ワインとはブドウの中に含まれている糖分が、酵母の働きによって第一次、第二次と二度の発酵の工程を経てアルコールに変換されて出来上がります。シャンパーニュ方式とはその二番目の発酵(第二次発酵)を瓶の中で行うことにより、発生する炭酸ガスを瓶の中に封じ込めワインに発泡性を持たせて造りだす製法です。スパークリングワインの中でも高級なものはほとんどこのシャンパーニュ方式で造られています。シャンパンと呼ぶことが出来るのは、シャンパーニュ地方でこの瓶内二次発酵で造られているもののみで、それ以外の地域で造られたものは、たとえ瓶内二次発酵方式で造られたものであってもシャンパーニュと名乗ることは認められていません。

シャンパーニュ地方で使用が許可されているブドウ品種は8種類ありますが、主要な3種をブレンドや単独で用いて醸造しています。シャルドネ(白ブドウ)で造られるシャンパンはブラン・ド・ブランと呼ばれ、爽やかさや繊細さを表現し、長期熟成を助ける役目もあります。柑橘類や白い花の香りが特徴です。ピノ・ノワール(黒ブドウ)で造られるシャンパンは強い果実味を持ち、シャンパーニュの骨格をつくり出し、滑らかな質感としっかりとしたボディが特徴です。ピノ・ムニエ(黒ブドウ)はピノ・ノワールの枝変わり品種で、葉の表面に綿毛のようなものが付き、裏面は粉がふいたように見えることからムニエ(meunier 粉屋)と名付けられました。味わいにやわらかさ、丸みを与えます。黒ブドウのみで造られたシャンパンはブラン・ド・ノワールと呼ばれています。シャンパーニュ地方の中でも土地の持つテロワールの違いや、造り手、ブレンドなどにより様々な味わいがあります。ぜひこの夏はご自身のお好みの味わいを見つけてみてください。

(法人会員 竹中 宣人)



Louis Nicaise champagne brut reserve

Recette des «Caviar d'aubergines» 「キャビア風ナスのピュレ」

今回は、7月7日のフランス・アラカルトにゲストとして参加して下さったシャボールさんが、この季節にぴったりの地中海風の家庭料理のレシピを紹介してくださいました。フランスではトーストしたパンの上のせて、食前酒とともによく食べられているそうです。(編集部)



【材料】 なす 3-4 本、トマト 1 個、ニンニク 1 かけ、オリーブオイル大 4、ケチャップ大 1、練りごま大 1、塩・胡椒 【Ingrédients】 3~4 aubergines, 1 tomate, 1 gousse d'ail, 4 cuillères à soupe d'huile d'olive, 1 cuillère à soupe de ketchup, 1 cuillère à soupe de pâte de sésame, sel, poivre

- 1) なすを 210°C のオーブンで焼き、皮をむく。(焼きなすの要領で魚焼きグリルで焼いてもよい)
- 2) 玉ねぎをあらみじん切りにする。Couper grossièrement l'oignon en cubes.
- 3) トマトは皮をむいて潰す。Éplucher la tomate et l'écraser
- 4) ボウルにすべての材料を入れて、ミキサーにかける。

Mettre tous les ingrédients dans un bol et passer au mixeur.

トーストしたパンやクラッカーにつけて召し上がれ。Servir sur du pain grillé ou des crackers.

フランス産チーズの紹介 (1) 「コンポステル」(Compostelle)

先日のフランス革命記念日に起こったテロ事件は記憶に新しいところ。心を痛めつつ、その背景には、宗教や民族、政治的対立による紛争、克服されない貧困など、さまざまな要因が複雑に絡み合っているのだろうと推測されますが、宗教とは何かと改めて考えさせられることがあります。そこで、今日は少し宗教色があるチーズをご紹介します。

ミディ・ピレネー、ロット県を中心に造られているホタテ貝の型押しされた姿がなんとも可愛いシェブル(ヤギ乳)チーズ、『コンポステル』です。このエリアには巡礼地で有名な「ロカマドゥール」という観光地があり、同名の小さなシェブルチーズが生産されているのですが、『コンポステル』はその「ロカマドゥール」とほぼ同産地で、同様の作り方をしています。



コンポステルという名前からバチカン、エルサレムとならぶキリスト教三大巡礼地となるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラに因んでいのでしょうか。そこに祀られている聖ヤコブのシンボルがホタテ貝。ヤコブを慕う巡礼者が着ている服に縫いつけていたホタテ貝をロカマドゥールで落としてしまい、それを拾ったチーズ職人が型付けに使ったとか…という話があるようです。外観は綺麗なアイボリーで、表皮の下はトロリとクリーミー。爽やかな風味で、優しいヤギ乳の味わいが心地よいチーズです。

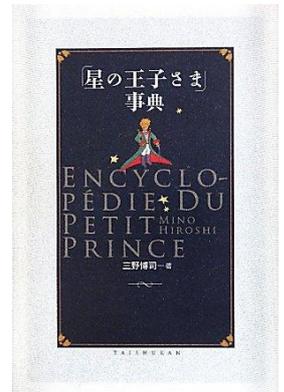
巡礼に参加したことも、お遍路を巡ったこともない私ですが、ただただ歩くことによって、生きるとは何か、大切なものとは何かという問いに対する答えが得られるのではないかと思います。いつか、この中世の街並みが残るロカマドゥールを訪れて、黒いマリア像に会ってみたいものです。

(法人会員 北田由佳)

『星の王子さま』講演会(6/22, 29)に参加して 各務 奈緒子(かがみ なおこ)

三野博司先生の『星の王子さま』についての講演は、「なぜ私たちは物語を必要としているのか」の副題のもと、この作品が子どもばかりでなく、大人にも向けられた「一級の文学作品」であるという強いメッセージを持つものだった。作品の中で王子さまが、いかに大人が「数字」に囚われているのかを話す場面がある。この「数字」の対極にあるものが「物語」ではないかとの指摘があった。

翻って、『星の王子さま』の中で最もよく知られた「心の目で見ないとよく見えない。いちばん大事なものは目には見えない」というフレーズもまさに、上辺の「数字」ではなく、内実を伴った「物語」の必要性を述べているのかもしれない。物語こそが人間にとって不可欠であるとの先生のご指摘に通ずるように思われた。講演を聞き、三野先生はこのような社会への強い思いを持ってフランス文学に取り組んでこられたのだと感ずることができ、非常に感慨深かった。



第41回シネクラブ例会(6/26) 報告

◆舞台はヒロシマ、平和を訴える国際映画を撮影しているという設定なので、メッセージ性の強い内容を想像していました。ところが、愛し合う肉体のアップではじまり寡黙で断片的なセリフ、男は翌日帰国する女をなんとか引き留めようと執着する展開で、原爆投下後の情景や市民運動などは挿入句のように登場します。むしろ邦題の《二十四時間の情事》が主題なのか。しかし、二人は徐々に存在に重みを具えだし我々は彼らの内部へと引き込まれて行きます。そして彼らは最後まで名前がないままついに一個の人格に達するのです。フランス語の« viscéral » (内臓的な) という表現を思い出しました。理性でも感覚でもない、それらが届かない内奥器官が受け持つような、という意味でしょうか。モノクロの映像と相まって様々な対立、男と女、広島とヌヴェール、幸福と悲惨、一発の銃弾と一発の原爆、これらが毒と栄養のようにまぜこぜになってうごめく。映画ならではの謎の力を受ける作品でした。(大内 隆一)



◆第二次大戦後15年目の広島を舞台にフランス人女性と日本人男性との恋の一日を描いたもの。かつて母国のヌヴェールで、敵国ドイツの兵士と恋におちいり街人にリンチされた過去を持つ女に、「広島に僕のそばにとどまってくれ」と男は懇願するが、女は拒む。互いに相手を「ヌヴェール」「ヒロシマ」と呼びながら進む恋愛は甘美であるが、同時に敗戦時の広島を襲ったビキニ水爆実験反対のデモなど、歴史的な断絶がクローズアップされるので恐ろしい。(泉悦子)

第42回 奈良日仏協会シネクラブ例会(10/23) 案内 ★10月23日(日)

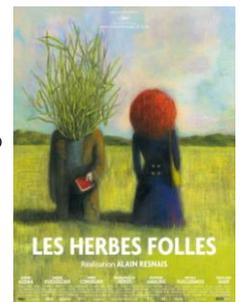
13:30~17:00 ★奈良市西部公民館5階第4講座室(予定) ★プログラム:アラン・レネ監督

『風にそよぐ草』(Les Herbes folles, 2009年, 104分) ★参加費:会員無料、一般300円

★飲み会:例会終了後「味楽座」にて ★問合わせ:Nasai206@gmail.com(予約不要)

★87歳のアラン・レネはこれまでになく自分の感情を投入して、人の気持ちの変わりやすさについての何ともいえず魅力的な物語を作ったが、これは彼の最も斬新な映画となった。「痛いじゃないですか!」とは、痛みを伝えると同時に非難の叫びだが、歯科医のマルグリット・ミュールはこれを一日中耳にしている。映画の中の短い面白いシークエンスのひとつである。この言葉が何度も繰り返され、そこに歯を抜く器具の拷問を止めてほしいと訴える患者の手の仕草が加わる。彼らは実際痛いのでありそのうめき声は正当なもの。それでもマルグリットは彼らの虫歯を探し、ただ彼らによかれと思って仕事をする。そしてこの不満の声が彼女を苦しめる。『風にそよぐ草』では、人生はあたかも歯科医の診察室のようだ。不可避免的に人が人を痛い目にあわせるのは、その人のためにと専心する時。悪意などまったくない。アラン・レネの小さな共同社会の中に敵意はない。にもかかわらず、人々は大いに苦しむ。警察官たちでさえも人を気遣って理解を示す善良な人々だ。それでもなお、誰もが人を悲しませ怒らせ辱める。「痛いじゃないですか!」この映画の隠れた合言葉かもしれない。

A 87 ans, Alain Resnais, plus empathique que jamais, compose un conte irrésistible sur la versatilité des sentiments pour l'un de ses films les plus audacieux. « Vous me faites mal ! ». C'est le cri de détresse, mais aussi de reproche, qu'entend toute la journée Marguerite Muir, dentiste de son état. C'est une courte séquence amusante des Herbes folles : la répétition obsédante de cette petite phrase, ponctuée du même geste de la main des patients pour que s'arrête le supplice de la roulette. Ces gens souffrent et leur plainte est légitime. Pourtant Marguerite Muir, fouillant leurs caries, ne travaille qu'à leur bien, et toute cette grogne l'afflige. La vie, dans Les Herbes folles, est comme le cabinet d'un dentiste. C'est en s'employant à faire le bien des gens qu'immanquablement on les blesse. La malveillance n'est nulle part. Pas de méchanceté dans la petite communauté humaine, pourtant bien souffrante, d'Alain Resnais. Même les policiers sont des braves types délicats et bien compréhensifs. Et malgré tout, tout le monde fait de la peine, contraire, humilié. « Vous me faites mal ! » pourrait être le mot de passe secret du film. (Pierre Silvestri)



会員紹介

ヴァイオリニストの旅

岩佐 直子 (いわさ なおこ)

強い日差しの中、散歩しながら眺めたギマールの建築。100年程前に建てられ、今も住み続けられているその瀟洒なアパートマンを見た時は嬉しさでいっぱいでした。図書館で何度も見た本の中にあった見開きいっぱいの美しい花瓶。早く見たくてオルセー美術館の中を小走りで探し、やっと見つけたそのガレの作品は、驚く程小さい作品でした。これらは友達と旅行した時の思い出です。専門の音楽でニースの夏期講習を受け、その後ドイツ、スイス、オーストリア、そして最後の3日間を憧れのパリで締めくくりました。

そんな大好きなパリでフランスの香りを学んできましたが、ある音楽との出会いがありました。作曲家の自筆譜からテンポや音色まで読み解き、今までの通念を覆すような独自の解釈をします。きっと私の目指す音楽のヒントがあるのでは、とバッハからハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン等のドイツ寄りの作曲家を中心に勉強中です。それでもお仕事でフランスものを弾く機会は多々あり、楽譜を見ると思わず可笑しくなる事があります。例えば音楽用語はイタリア語ですが、これだけでは表現しきれないようで、フランス語で細かくニュアンスが書かれてたりするのを見ると、フランス人らしいなと思いながら弾いています。

私は小学生の時に親とオーケストラのコンサートへ行きました。その時ヴァイオリンが格好良く見え、習い始めました。そして不思議な事に今の今まで続きます。その凄いなあと思ったオーケストラで弾ける事が私にとって幸福な事です。今では運の良い事に奈良フィルハーモニー管弦楽団でお世話になってます。年に2回秋(2016年9月4日)と春(2017年3月26日)に定期演奏会が奈良公園の中の奈良県文化会館であります。奈良で「もっと楽しいコンサートを」をモットーに、メンバーが一団となって色々な作品に情熱を向けてます。ヨーロッパの音楽がアジアの端にある日本で、しかも古い歴史とお寺に囲まれた奈良で音になり響いている事は私には不思議な気がします。



小説の中のパリ旅行

小泉 辰朗 (こいずみ たつろう)

小説『ダ・ヴィンチ・コード』(角川文庫)を読んだことありますか? 小説の中には、パリ好きの人なら誰もが知っているルーブル美術館、サン・ラザール駅、サン・シュルピス教会、が登場します。有名な観光地が、作家の筆先でイメージとまったく違うものに表現されています。小説の始まりで事件が起こったルーブル美術館はモナリザなどが有名ですが、世界的な美術館で残虐な事件が起こるとは驚きでした。ダ・ヴィンチ・コードの映画では、衝撃的シーンが撮影されていたので、他の映画やCMなどで使用されるときもあるようです。

主人公が追っ手からの目をくらましたサン・ラザール駅は、パリで一番古いターミナル駅。クロード・モネが駅や機関車に感動して絵にしています。駅舎やホームは大阪万博以前の阪急梅田駅の感じがします。駅舎好きの



私は、昔のターミナルの状態がまだまだ残っているこの駅が大好きです。一日中いても飽きません。駅中(エキナカ)の無印良品の店はにぎわっていました。海を知らないパリっ子を、むかし海水浴に初めて連れていってくれたのもこの駅からでした。秘密を解く鍵が隠されているという設定のサン・シュルピス教会は、パリ6区サンジェルマン・デ・プレにあり、パリ第二の大きさの教会堂でドラクロワの壁画でも有名です。ところが意外にも、堂内の椅子は日本の信州蕎麦店の椅子と同じでした。また、真鍮の精巧な日時計の指時計(グノモン)の先が堂内の床からオベリスク(記念碑)まで繋がっています(左写真)。堂内に日が入ると真鍮の線の上を光が走ります。

それは、グリニッジ標準時間よりも前の時代の貴重な子午線であります。

フランス人は時計を持たないと聞きました。教会の鐘の音で時間を知ることができるからとか。だから正確な鐘を鳴らすために時を刻む日時計が教会の中にあるのかと感心しました。私は小説からたどる旅も結構良いものと思ってお勧めします。なかなか海外旅行にも簡単に行けませんが、小説の中でのパリ旅行も楽しいものです。

第132回 フランス・アラカルト「ベルギー社会の仮面とカーニヴァル」

- ❖ 日時：2016年9月5日(月) 15:00~16:50
- ❖ 会費：会員 1000円 一般 1500円 (飲み物とお菓子付き)
- ❖ 会場：生駒市セイセイビル 2階 205 会議室 (近鉄生駒駅南へ徒歩2分)
- ❖ 問い合わせと申込先： Nasai206@gmail.com tel & fax : 0743-74-0371 (浅井)
- ❖ ゲスト：ジャン＝ノエル・ポレさん (略歴)：45年前にベルギーに生まれる。2000年から日本に居住。現在、アンスティチュフランセ関西、甲南大学、同志社大学、大阪大学にてフランス語講師。



"Le Combat de Carnaval et Carême" de Pieter Brueghel, 1559

(Mon Nara 2016年3-4月号の Nos amis francophones à Nara (5) の記事にて紹介)

❖ ポレさんからのメッセージ：9月5日は「ベルギー社会の仮面とカーニヴァル」について少しお話しさせていただきます。最初にベルギーの歴史における仮面とカーニヴァルの意味について言及し、続いてベルギー絵画史におけるこの主題についての作品を見ることにします。

Le 5 septembre, je ferai un petit exposé sur «le masque et le carnaval dans la société belge». Dans un premier temps, j'évoquerai le sens du masque et du carnaval dans l'histoire de la Belgique. Ensuite, nous regarderons des représentations de ce sujet dans l'histoire de la peinture belge. (Jean-Noël Polet)

2016年度 秋の教養講座(11/23)の案内 ★毎年恒例の「秋の教養講座」、今年は「フランスワイン」

のお話です。★日時：11月23日(祝) 15時~17時 ★会場：放送大学奈良学習センター Z308室 ★講師：中浦 東洋司 (当協会理事、準ワインエキスパート) ★演題(仮題)：「フランスワインの奥深い魅力を探る—ブルゴーニュ、ボルドー、シャンパーニュ」★講師からのメッセージ：ワインの国フランスの中でもその双璧といわれるのは、西南部のボルドーと中部のブルゴーニュで、そこで生産される多くの銘柄について述べ、さらに高緯度のために適切なぶどうの生産困難だったシャンパーニュ地方を「発泡ワイン」で克服して、世界的に有名にしたドンペリニオンについて述べたいと考えております。★講演後の17時20分からビストロ・プティ・パリ(奈良市小西町)にてフランス料理の懇親会があります。会費は、会員5500円、一般6000円。懇親会への参加も可能です。会員の皆様のご参加をお待ちしております。★申込先：Nasai206@gmail.com

《2016年度第3回理事会報告》…事務局

日時：2016年7月21日(木) 15:00~16:30
場所：Café Wakakusa 2階 出席者：三野、野島、井田、濱、中浦、高島、藤村、浅井
議題1. 5/19理事会後の活動：(5/29) 第130回アラカルト「ルノワールの映画『ゲームの規則』を語る」、(6/22, 29)「登美南教養セミナー『星の王子さま』を読み解く」、(6/26) 第41回日仏シネクラブ例会『24時間の情事』、(7/7) 第131回アラカルト「日仏交流の集い」、(7/14) フランス総領事主催パリ祭レセプション 議題2. 今後の行事：(9/5) 第132回アラカルト「ベルギー社会の仮面」、(9/24, 10/15) ガイドクラブ勉強会・當麻寺散策、(11/23) 秋の教養講座、フランスワインをテーマにした講演会。懇親会はビストロ・プティ・パリ於 議題3. Mon Nara 議題4. 2016年度7月の暫定会員98件 (新入会員1)、今年度会費未納会員には Mon Nara 276 に振込用紙同封 ※次回理事会9月29日(木) 15:00~16:30 放送大学奈良学習センターZ308室

会員通信

- ★7月刊別冊太陽 241 『写実絵画の新世紀』と総合ムック誌『美と幻想の世界』に、写実・幻想絵画論を執筆しています。(南城)
- ★8月18日(木) 20:00 「梨里香バースディライヴ」(シャンソン) コンテ・ローゼ(心齋橋)にて、連絡先 090-9614-6477 (中辻)
- ★8月20日(土) 14:00 「奈良県ファインアーツコンサート」奈良県文化会館国際ホール、ピアノ上田賀代子、連絡先 090-2193-3295 (上田)
- ★8月20日(土) 15:50 「奈良県音楽芸術協会特別演奏会」奈良県文化会館国際ホール、ピアノ三木康子、連絡先 090-9982-5863 (三木)
- ★9月3日(土) 18:30 「ジョイントギターコンサート」橿原市ターネ・ザール・ホール、金谷幸三出演、連絡先 090-5967-1924 (金谷)
- ★9月4日(日) 18:30 「奈良フィルハーモニー管弦楽団定期演奏会」奈良県文化会館、ヴァイオリン岩佐直子出演、連絡先 090-5042-3659 (岩佐)



編集後記

★ 真夏の炎天下、こんもりとした木立になみなみと花を咲かせるサルスベリ(sarusuberi)。濃いピンクの房が青い空に向かって高くのびている様を見ると、しばし地上の暑さを忘れ涼やかさを感じることがあります。★漢字で書くと「百日紅」、夏から秋にかけて100日間も紅色の花を咲かせ続けることに由来するようです。★子供の頃、幹がつるつるして木登り上手な猿も滑ってしまうといわれるこの木に登ろうと試みた人もいるのでは。★中国南部が原産で、日本には江戸時代初期に入ってきたようですが、フランスにもいつからかもたらされ、「lilas des Indes」(インドのリラ)と訳されています。★「百日紅浮世は熱きものと知りぬ」(Les lilas des Indes / le savent bien / ce monde flottant est si chaud) という漱石の句からは、夏の暑さが肌に伝わってくる感じがします。★正岡子規の「青天に咲きひろげけり百日紅」(Dans le ciel bleu / pleinement épanouis / les lilas des Indes) には、夏の空を見上げる子規の視線に思わず共感です。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は**9月30日**が原稿締切日です。

Mon Nara juillet-aout 2016 **7-8月**合併号 numéro276

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : http://www.afjn.jp E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司